

## 天草方言で読む【吾輩は猫である】 夏目漱石 鶴田 功 〈意識〉

吾輩は猫でござす。名前はまだござっせん。どけーで生まれたっじゃい、とんと見当んつきやっせん。たしきやー、薄暗かじめじめした所ってニャーニャー泣やーとったこた一憶えとる。

吾輩はこけーで初めて人間ちゅうもんば見た。書生ちゅう人間の掌にのせられて、すーっと持ち上げられ、一時やよか気持ちで座とったばって、ひょくっと吾輩の体は、えらい速さで動き始めた。やたりや目の廻る。胸ん悪うなる。こりやとても助からんばいと思うとったりや、どさっと音んして、目から火のてた。

そりまでは覚えとるばって、後は何のこっか幾ら思い出そうとしてんわからん。ひょくと気じいてみれば、書生はおらん。ぎょうさんおった兄弟が一匹もおらん。肝心の母親さえ姿ば見ん。

そん上、今までん所と違うてやたりや明っか。目ば開けとりえんごたる。どうも何じやい様子んおかしかともて、のそのそ這いじゃあてみれば、何様身体ん痛か。

吾輩は藁ん上から笹原んなきや捨てられたたい。よよして、笹原ば這いじゃあたりや、むけーふとか池ある。

吾輩は池ん前にうっ座って、どがんしたろよかろかにやて、考えてみた。別にこれちゅう分別も浮かばん。ニャーニャーちゅて試しに泣やーてみたばって誰も来ん。

そんうち日の暮れ掛かる。なんさま腹ん減ってきた。泣こごたるばって声ん出ん。しよんなか。何ちゃよかけん食い物のあつ所さんあいぼうて決心して、そろそろ池ば左に周りじゃーた。

何様どもこも苦しか。そこば我慢してがむしゃらに這うて行たりや、よよして人間臭か所れでた。

竹垣ん崩れた穴から、とある邸内に潜りくうだ。縁ちゅは不思議なもんで、もしこん竹垣が破れとらんじゃったら、吾輩はとうと路傍に餓死しとったかも知れんばい。

そりばっかりか、ひいては吾輩の主人も吾輩の存在による型破りんこん傑作のお陰で、一躍文名ば天下にうたわるるにや至らんじゃったろもん。

さあて、吾輩は邸にや忍び込うだもんの、こりから先どがんすればよかっじゃい分からん。そんうち暗うなり、腹は減る。寒うはなるし、雨は降っだす始末で、一刻の猶予もでけんごてなった。

しよんなかけん、とにかく明こうして暖くそうな方に歩いて行く。今から考ゆっと、そん時はすでに、家ん中に這入とったごたる。ここで我輩は、あん書生以外の人間を再び見る機会に遭遇したと。

その第一番に会うたとが下女のおさんである。これは前の書生よりまあだでん乱暴で、我輩を見るやいなやいきなり首筋ばつかんで表に放り出やた。

こりや駄目ばいて思うたけん眼をつぶって運を天に任せとった。ばってひだるかっど寒かっどにはどがんも我慢できん。我輩は再びおさんのすきを見て台所に這上ったが、またも投げ出された。

我輩は投げ出されては這い上がり、這い上がっては投げ出され、何さま四・五へんどま繰り返したとば記憶しとる。そんときにおさん族ちゅうものがつくづくいやになった。

我輩が最後につまみ出さりゅうてしたとき、この家の主人が、騒々しか何ごつかと言いながら出てきた。下女は我輩をぶら下げて、主人のほうへ向けて、この宿無しの子猫がいくら出しても出しても台所に上がってきて困りますて言う。主人は鼻ん下の黒か毛をひね

りながら、我輩のツラをいっとき眺めとったが、そんならうちへ置いてやれというたまま奥へ入ってしもた。主人はあまり口をきかん人のごたる。下女は下女は口惜しや我輩を台所に放りやった。こっかんして、我輩はついにこの家を自分の住み家と決めることにしたわけ。

我輩の主人の職業は教師ちゅうた。学校から帰るとずうっと書齋に入ったっきり、ほとんど出てくることはなか。家の者は大変な勉強家て思うとる。当人もそがん見せとつとばって、実際はそがん勉強家じゃなか。我輩は時々忍び足で書齋を覗いて見るばって、彼はゆう昼寝しとるごたる。時々読みかけの本の上によだれくつとる。彼は胃弱で悩んどるくせに大飯食らいである。そのあとでタカジアスターゼという胃の薬を飲む。飲んだあとで書物をひろぐる。二・三ページ読むと眠うなる。よだれば本の上に垂らす。これが毎晩繰り返す彼の日課である。教師というものは実に楽なもんだ。人間に生まれたるば教師になるに限る。こがん寝とつて勤まっとなろ猫にっちゃでくつとて、我輩は猫ながら時々思うことのある。それでっちゃ主人にいわせれば教師ほど辛いもんななかそうで、彼は友達が来るたんびになんとかかんとか不平をもらしよる。

我輩はこの家に住み込んだ当時は、主人以外の者にゃはなはだ不人望じゃった。どけいたてもはねつけられて相手にしてくれ手がおらんじゃった。いかに珍重されとらんじゃったかは、今日に至るまで名前しかつけてくれんとでもわかる。吾輩はしよんなかけん、出来うる限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居るこてつとめた。朝、彼が新聞を読むときゃ膝の上に、昼寝のときゃ背中の上に乗る。その後色々経験の上、朝は飯びつの上、夜はこたつの上、天気よか昼は縁側にぬるこてした。ばって、一番心地よかとは、夜になって、ここの家の子どもが寝床にもぐり込むことである。この子どもというのは、五つの姉と三つの弟で二人が一つの床に入って一間でぬる。ばって、子どもの一人が目をさませば最後ううごとになる。ことに小かほうがちの悪か。猫が来た猫が来たちゅて、夜中であんなんでん大声で泣き出す。そうすれば、例の神経胃弱性の主人は必ず目ばさみゃーて隣の部屋から飛び出てくる。現にこないだは物差しで尻っぺたばえつと叩かれた。

主人が学校に行かん日は、いつもだりか客人が来て、主人ば取り巻いて、のんびりした世間話てるん議論にふけつとる。こがんした客の顔ぶれはたいぎゃきまつとる。主人と同年輩ぐりゃもおるばって、ほとんど若っか連中である。吾輩はいつも主人の膝の上で見とるけん彼らの顔も名前も自然に覚えっしもた。吾輩には吾輩は猫であるちゅう他には名前はなかばって、この常連はみんなそれぞれ妙ちくりんな名前ば所有しとる。一人で二つ三つ持つとるものもおる。先ず主人は苦沙弥<sup>くしゃみ</sup>先生である。これは姓名の姓であるか名であるか、それとも雅号というものであるかゆうわからん。猫は人間のごてクシャミはせんばって主人はいつじゃい自分の顔を鏡にうつして見て、吾輩の顔は猫がクシャミしとるごたるちゅて嘆きよつとば聞いたことある。以来、苦沙弥の雅号を用いはじめたと考えられんこともなか。次に主な面々は、迷帝、水島寒月をはじめ越智東風、多々良三平の諸君であるが、このうち迷帝君もこれはあきらかに姓のほうか不明である。時々どうも迷帝君のしゃべりよつとば聞いとれば、主人の苦沙弥先生の思考と相通じるところがあり、常に木戸ご免のていで偶然童子のごて苦沙弥先生の面前に現れて迷論をはいとるけん、主人と同一

人じゃなかかと吾輩をして時々迷わしむることしかある。主人は近頃、水彩画と称する絵の稽古に夢中になつてゐるばって、ある日迷帝君がやってきて、昔、イタリアの大画家アンドレア・デル・サルトが「絵を描くなら何でも自然そのままを写せ」ちゅていうとるばって君も絵らしい絵ば描こうと思うなら、ちった写生ばしたらどがんかと忠告した。

主人はデル・サルトのことばに感心し、以来むやみに吾輩をモデルに使うけんこちらは自由を束縛されてはなはだ迷惑しとる。迷帝君は美学者そうにある。大学時代とかに小石川の寺に主人と一緒に自炊しとった仲らしか。

寒月君は主人の旧門下生じゃったちゅうばって、今は理学士で、大学院で地球の磁気とかいうものは研究中ちゅうた。首つりや身投げの力学の研究で博士論文をものにしゅうともて珍実験を試み、失敗を重ねては迷帝先輩の笑い話の種に供されとる。

演奏会に出てバイオリンを弾き、女学生たちにもてとるようである。主人の所へ遊びに来れば、自分を慕っている女がありそうな、なさそうな、世の中が面白そうな、つまらなさそうな、凄かごたる、艶っぽかごたる文句ばかり並べてにゃ帰りよる。

東風君は寒月君の後輩で、純情型の青年詩人である。主人が俳句や新体詩にも手を出しとるけん、時々新作ば持ってきて主人に批評を頼んどる。

三平君は、肥前の国は唐津の出身で、もてこの家の書生であつたばって、今では法科大学を卒業して、六井物産会社の鉱山部に雇われ、今まで九州の炭坑におつたばって、こないだ東京詰めになつたちゅた。日曜毎に一日中遊ぶで帰るぐりゃここん家族とにゃ遠慮のなか間柄である。

その他、哲学者の八木独仙先生とか、六井社員の鈴木藤十郎ちゅう、主人の級友などもおいおい現れてくるばって、あとは略しとく。